

博物館と後樂園

館長 富岡敬之

最近、私は一枚の絵を見せてもらった。それは明治12年（1879）の岡山県立博覧会の錦絵で、いまの丸之内中学校の位置から、会場となった岡山城方面を展望したものである。石垣の上にはまだ多くの建物が残っており、お堀ばたには博覧会をあてこんだ露店が立ちならび、天守閣の上には軽気球さえぼっかりと浮かんでいる。まことに華やかな博覧会風景である。

4月1日の開場式には、岡山市中の芸娼妓が残らずつめかけているどりをそえたことなど、郷土史家岡長平氏の著述にくわしく紹介されている。

それにつられたわけでもないが、早速、当時の『山陽新報』を調べてみた。すると2月11日の記事には、「師範学校より本年開設の博覧会へ軽気球の雛形を出品せらるる由、随分当地にてハ珍敷ものなれハ、定めて人智を開くの一助ともなりませう」とあり、閉会間近の5月27日の記事には、「一昨日は兼て報道せし通り博覧会場に於て軽気球を揚げられしが、時は午前11時40分頃にて、折節東風の起りて一旦は西方に吹き至りしに、又もや西南の風となり、東北に向って段々に高く進みしが、終に見失ふに至りたり。見る人皆な感賞せざるはなかりき」と、まことに文明開化を地で行く風景であって、私の見た錦絵は真景であることが知られた。

明治12年2月19日には当時の県令高崎五六が、今回の県立博覧会は、「新古今ノ品物ヲ陳列展観セシメ、人智ノ開達ヲ裨補セントス。就中古代ノ器物ハ世故ノ沿革ヲ考徴スルニ最モ要用ノモノニ付、社寺所蔵、宝物什器等、可成出品候様可致」と、これまた非常にむづかしい文章の「諭達」を県内の寺社へ出している。「古代ノ器物」は人間社会の発展を示す貴重な資料であるから、東京の博物館もこの博覧会のために、千鳥の香炉、加藤清正の甲冑、武田信玄が川中島で使った軍配団扇等を出品している。博覧会とともに博物館もまた、明治新政府が開化政策のための重要施設と考えていたものである。

それからまた、2月3日の『山陽新報』には、「此度の博覧会に付き、天守閣の後より直に舟渡りにて池田家の所有地なる後樂園を縦覧せしめらるるに依り、夫々掃除に取掛らると云ふ。此園ハ天下著名なるものにて、東京

吹上の禁園、浜の離宮に劣らぬ名園なれば、博覧会中第一の見物で五座りませふ」とあり、博覧会、博物館、後樂園がセットになって、あたかも岡山県立博物館が後樂園外苑に立地することになった100年後の今日を見越したような感じである。

後樂園はいまや市民のために常時開放されている。岡山県立博物館もまた「岡山県の歴史と文化」を常時展観して市民の稽古照今の資となることを期しており、それは博覧会のみだけの一時的なものではなくなっている。別にむづかしい文章の出品「諭達」を出したわけではないが、先頃、東京在住の県出身者、日笠賢氏から「備前国住長船孫右衛門尉清光 為日笠次郎兵衛尉頼房作之」と銘文のある永禄10年（1567）作の末備前の名刀を、また久米町の甲本博信氏からは古備前大麴その他を、水ノ子岩学術調査団からは水ノ子岩海揚りの備前焼資料一括の御寄贈をいただいた。いずれも本館が以前から資料としてもとめていた品々である。

これらのかたがたの御厚意に対し、紙面を借りて深く感謝の意を表するとともに、今後の活用をお約束するものである。



県立博覧会錦絵 部分

随 想

浦上宗景と日笠頼房

柴 田 一

このたび、日笠頼房の末裔に当られる日笠賢氏から、本館に「為日笠次郎兵衛尉頼房作之」の為書が刻まれた備前清光の刀を寄贈いただいたのを機会に、和気郡天神山城主浦上宗景と、青山城主でその老臣である日笠頼房の関係を考えてみたい。

頼房は、天文2年（1533）天神山築城から、天正5年（1577）その落城に至る44年間、宗景を補佐した股肱の臣である。宗景は晩年、かつて信頼した多くの腹心に裏切られ、落城した天神山をあとに、頼房ら僅かの家来に守られて流浪する運命をたどる。この悲劇の原因を、天神山挙兵の時期までさかのぼって考えてみよう。

播備作3国の守護大名赤松晴政の勢力が衰え、代ってその家臣であった浦上村宗が、和気郡三石城に拠って抬頭した。享禄元年（1528）村宗が没して長男政宗が立つと、晴政の子赤松政村を討って白旗城を陥し、播州室津に拠って赤松にかわる新興勢力となった。政宗の弟宗景が、兄のもとから離反独立を目論むのがこの時期である。

『天神山記』によると、この離反独立の相談にのったのが、浦上の家来大田原実時・日笠頼房・岡本竜実、ついで加盟したのが明石大和・同飛驒である。日笠賢氏の考証によると、日笠家は平安末・鎌倉初期以来、和気郡日笠庄を拠点とする旧族である。他も和気郡を中心とする備前の戦国土豪であったと考えられる。このことから、抬頭した浦上の家臣団の内に、播州派と備前派の対立が生じ、備前派の家臣たちが、総領の単独相続に不満を抱

く宗景を擁立したと推理することが出来よう。

ここで注目されるのは、かれらが離反独立の拠点として選定したのが、他ならぬ天神山であったことである。『天神山記』は、「天神山は三石より近く、嶮岨の高山にて、要害無双の城地」であるためとしているが、理由はそれだけではあるまい。天神山に隣接して、頼房の拠点である日笠庄があり、後に天神山の「外濠」の役目をになう青山城があったことの意味はきわめて大きいと考える。「随ふ侍下部迄百人計」の挙兵では、腹心の頼房の拠点にたよる他はなかった筈で、事実『天神山記』は、宗景が最初日笠村に逃れ、天神山普請のあいだ、その地に留っていたと書いている。

それにしても、宗景・頼房がやがては政宗を討ち、播備作統一を考えて離反独立を決断したとすれば、何をおいても、山陽道に臨む播備国境の要害の地、三石城に拠った筈である。この城が宗景の父村宗の居城であったことを想うとなおさらである。この「攻め」の都合より「守り」の都合、戦略的価値より戦術的価値を重視した拠点設定は、この時点ですでに「守りの浦上」の性格を基本的に規定したものといえる。戦国動乱のなかで44年間、ついに外敵の侵入を許さず天神山を保守したことは、「守りの浦上」の面目躍如たるものがあり、参謀頼房の名指導ぶりが窺える。

さて宗景は、遠近の「庄屋・荘官・器量ある者」を譜代に召抱え、家臣団の編成を進めた。つまり戦国土豪層の掌握である。農民支配の方も、近郷の者は「一廉の恩賞」を期待して「銘々住宅を崩し天神山へ持運」んだというから、日笠庄の名主・百姓ぐらいは掌握していたであろう。しかし、天神山から程遠からぬ益原村大樹山の僧兵、本庄の「郷侍」森・恒次の一族たちでさえ、宗景の誘いを拒否しているぐらいであるから、かれが掌握で



浦上家重臣裁許状
永禄11年
備前市 来住伸俊氏藏

備後一宮・吉備津神社

54. 5.15～6.17

きたのは、かれの被官になった個別の戦国士豪層で、一般農民層を含めて直接的、一円的に支配できたとは考えられない。そこにかれの家来である戦国士豪の中から、異常に肥大化する者があらわれる余地があったと思われる。

特に肥大化したのは、天神山周辺の譜代的被官ではなく、所領の外縁部を拠点とする外様の被官、邑久郡高取城主の島村豊後、上道郡沼城主の中山備中などその例であるが、典型的人物は、邑久郡邑久郷を本貫とする宇喜多直家であった。かれは宗景の「守り」の姿勢に乗じて肥大化した島村・中山の討伐を代行し、邑久郡の殺倉地帯と福岡の商業都市（豪商）を掌握してますます肥大し、やがて主君宗景と比肩するに至った。「守りの浦上」と「攻めの宇喜多」の対立である。この対立が表面化したのが永禄9年（1566）明禪寺合戦の時点で、ここに至って宗景・頼房の専守防衛の戦略が完全に裏目に転ずる。天文2年離反独立の時期には、「守りの浦上」を支持した宗景の被官衆も、野心に富む直家が抬頭すると、その将来性を買って「攻めの宇喜多」支持に転向した。永禄11年（1568）の裁許状（来住家文書）に連署した、重臣6名のなかに名を連ねる延原・明石まで、宗景を捨てて宇喜多についてはその例である。落城まで宗景をたすけたのは、頼房のほかにはひとにぎりの被官にすぎない。

天神山落城の過程を、天正5年4月青山落城、8月天神山落城の2段階でとらえたのは、『日笠荘』の著者日笠賢氏の卓見である。同書を読むと、直家は、「日笠対宇喜多」という宗景家臣団内部の私闘をよそおって青山城を攻め、まず天神山の「外濠」を埋め、ついで「本丸」の天神山城を陥したものと考えられる。

頼房は終始一貫して宗景の参謀役をつとめ、専守防衛の戦略で外敵の侵入から天神山を守り通した。しかし皮肉なのが歴史の運命で、外敵から自らを守った優れた戦略が、逆に「獅子身中の虫」を肥大させ、家来の手で滅される運命となった。老参謀頼房は、戦さにやぶれた傷心の宗景をいたわりながらなお流浪の旅の供をつづけたのである。（主たる参考文献：日笠賢氏著『日笠荘』（中央公論事業出版）『天神山記』（吉備群書集成）



刀 銘清光
永禄10年

吉備津彦命を祭神とする神社は、西日本に広く分布している。広島県芦品郡新市町に鎮座する吉備津神社もその一つで、かつては、備後国の一宮であった。現在も、備後地方の人々に、「一宮さん」と呼ばれて親しまれている。その創立は、社伝によると、大同2年（806）、備中から吉備津彦命の分霊を移したと伝えられており、もとは、備中吉備津神社の分社であったと思われる。

鎌倉時代初期の寛喜元年（1229）、社殿を焼失したが、その後再建された。『一遍聖絵』には、弘安10年（1287）に、一遍が、備後一宮に参詣、舞楽を奉納したことが記され、その社殿の一部が描かれている。元弘元年（1331）、神社背後の桜山城城主桜山茲俊が、後醍醐天皇に味方して破れ、桜山城が落城した際、神社の社殿も兵火で炎上しており、室町時代に入って、備後守護宮氏らの力によって漸次再興された。中世には尾道の浄土寺と関わりがあったようで、浄土寺に伝わる嘉元4年（1306）の『定證起請文』によると、浄土寺金堂が落慶したとき、吉備津宮の楽人が舞楽を奏している。

江戸時代の初期には、福島正則に社領を没収され、一時衰微したが、慶安元年（1648）、福山藩主水野勝成のとき、現在の本殿（重文）が造営され、社領53石余が寄進されており、のち福山藩主となった阿部氏からも保護され栄えた。

神社には、木造狛犬3軀、毛抜形太刀4口（以上重文）、銅製錫杖頭（県重文）1柄、舞楽面、境内古図などのほか多数の文化財が所蔵されているが、古文書類は少ない。このため、展覧にあたっては、尾道市の浄土寺、府中市の栄明寺からも資料を借用して、備後吉備津神社の歴史を紹介した。



木造狛犬 鎌倉時代

本展示のため、貴重な資料をこころよくご出陳くださった吉備津神社・浄土寺・栄明寺に心から感謝致します。

出品目録

一宮重興記	1巻	慶安元年
吉備津神社境内絵図	1幅	江戸時代初期
舞楽面(陵王)	2面	室町時代
(納曾利)	1面	〃
◎狛犬	3軀	鎌倉時代
◎毛抜形太刀	4口	室町時代
吉備津神社絵馬(境内図)	1面	安永8年(1779)
〃(黒船来航図)	1面	江戸時代末期
吉備津神社文書	4点	江戸～明治時代
○錫杖	1柄	応仁3年(1469)
燈籠(鑄製)	1基	天正18年(1590)
〃(銅製)	1基	慶安元年(1648)
紺絲威二枚胴具足	水野勝成寄進	
	1領	江戸時代
葱絲威八枚張二枚胴具足	阿部正弘寄進	
	1領	江戸時代
◎浄土寺文書(定證起請文)	1巻	嘉元4年(1306)
○〃(高師泰下知狀写)	1巻	貞和2年(1346)
栄明寺文書	2点	江戸時代

(◎国指定重要文化財 ○広島県指定重要文化財)

学芸員実習をおえて

岡山理科大学学生 高橋義典

地方の博物館が、地域性の特徴を出すことに重点をおくのはどこもそうであろうが、この岡山県立博物館の場合も岡山県の歴史を中心にした考古、文書、絵画、工芸、民俗に重点がおかれている。ここでの実習は、学芸員の仕事の内容のあらましについて研修することであった。学芸員の仕事を要約すると、資料の収集・保存、展示、研究である。

さて、第1日目は考古資料、歴史資料、民俗資料の保存とその展示の研究の方法、学芸員としての心がまえなど多様な内容である。学芸員の第一に大切な心得は、物を扱うときの細心の注意である。特に運搬の時などは、盗難に合わないよう終始物品に気を配り、物品から目を

離すことなく、またキズをつけたり、破損したりすることのないよう梱包に気を配らなければならない。次に大切なことは、資料の整理である。整理をきちんとしておかないと後でわからなくなる。整理の仕方は担当者個人の自由であろうが、一般的には、誰が整理しても一番整理しやすい方法や、後で取り出すときもすぐに見つけやすいように整理する。

2日目、3日目は美術品、工芸品などや資料の科学的処理の仕方、保存、保管の仕方を学んだ。資料を扱う専門家としての態度、人から物を借りた場合における物品の取り扱い方法など、色々大学では学ぶことのできない実践的な事を学習することができた。美術品などの取り扱いには、まさにはれものにもでも触れるような手つきで、私たち見ている者も息をのむような実習であった。梱包の仕方なども大学では学ぶことのできないものである。

全体に岡山県立博物館は、設計上の問題点が少なくないと思われる。もともと博物館は、相当な余裕をもって建てるべきで、岡山県博の場合収蔵庫が小さく、資料がふえてくると入れなくなるといった問題がある。これから考えて博物館の建設の時点で、学芸員も設計に参加する必要があると思う。また、館内の空調が全部一定であるため、物によって湿度の高い方がよい物や、低い方がよいものなど違っている為、資料に充分適した保管がしにくいといった問題。殺菌室が地下にある為有毒ガスがたまりやすい。エレベーターが小さすぎる。資料を出し入れする口が小さすぎる。天井が低い。資料を運び込む通路に階段がある。という問題もみうけられた。立地条件としては、まず良好であろうが、三角州の上に建てられている為湿度が高くなりやすいなどの問題も出るようである。今はどこの博物館でもそうらしいが、学芸員が足らず多忙をきわめるとの事である。

この博物館実習で感じたことは、学芸員としての自覚を持ち色々な工夫をしながら展示、その他の仕事に従事し、研究の意欲をいつも持っていることである。仕事としては、自分自身の力を十分に発揮でき有意義な職であるが、その博物館の評価が学芸員の力量にかかっていることを思う時、社会的責任の重大さが感じられる。ただ学芸員の需要が少ないのが私達には残念である。

備中神楽面作り

講習会に参加して

梶田祥子

幼き日、父の肩車から息をこらして見つめた大蛇退治。おはやしの音色が今も耳の奥に残って響く。大分で見た神楽は、備中神楽と少し違うようであるが、須佐之男命

の黒々としたひげや、夜の光できらきら光る目が、妙にあやしく恐しかった。

53年春、主人の転勤で津山に來た。どうやら落ちついた6月、新聞で博物館の伝統を受けつぐ会が「備中神楽面作り講習会」を募集しているのを見つけて、早速申し込んだ。新しい土地で、他では出来ないことに挑戦したいとひそかに闘志を燃やして……。

木彫が好きで、鏡や盆等彫っていたから、彫刻刀には馴れていたが、最初桐の丸太を半分にした素材を渡された時は、どうなることかと不安だった。きこちなくノミを握り、上田春山先生の指導で彫り始めた。須佐之男と稲田姫である。耳馴れない岡山弁が聞きとりにくかったが、36名の受講者中13名が女姓だったのに勇気づけられた。毎週金曜日、仲間と批評しながら彫るのはとても楽しい。先生のたすけを借りてどうにか面が彫り上がり、胡粉をぬり重ね彩色をした。9月には作品発表会と神楽舞いを見る機会も持った。

今年おむねのねのみことは思兼命・經津主命・武甕命・爺・婆を彫ったが、塗りがまだである。今、夜叉を彫っているが左右のバランス、凹凸、口のあけ方、鼻の形が難しい。面は上から眺めるだけでなく、いろんな角度から見るのが大切だとつくづく思う。2時間半の車中では、顔のしくみを観察することにしていたのでたいくつしない。来年は、猿田彦・松尾明神も彫ってみたいと思うが、いい面はなかなか彫れないものである。(津山市小田中28)

予告 テーマ展

「豊彦と義董— 岡山の四条派」

江戸時代後期、呉春(松村月溪)は与謝蕪村ふせむらに学んだ俳諧と南画で身につけた文芸的・抒情的な作風に、円山

応挙の写生画風を加味した折衷様式をもって独自の画境を築いた。その平明で親しみやすい画風は時流に適い、かれの創始した四条派は応挙の没後、円山派にかわって京都画壇の主流を占めた。

四条派では「花鳥は景文、山水は豊彦、人物は義董」とそれぞれの得意分野が称されている。うち、豊彦、義董は岡山県の出身者である。

岡本豊彦(1773~1845)は現倉敷市に生まれ、はじめ玉島の黒田綾山りょうざんに就いて南画の法を、のち上洛して呉春の下で多年の研鑽を積み、松村景文とともに四条派を支えた。南画的な雰囲気をつたえた山水画に個性がうかがえる。豊彦門からは塩川文麟・柴田是真・古市金峨きんがらが輩出し、画系は近代日本画の竹内栖鳳へと連なる。

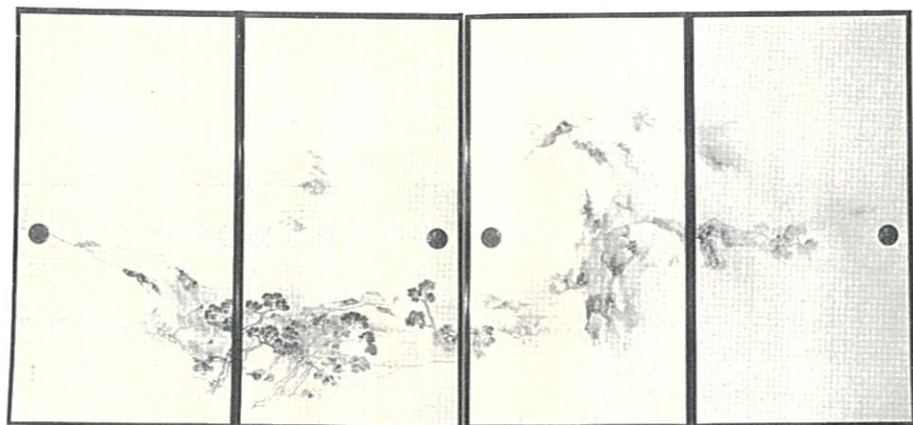
柴田義董(1780~1819)は現邑久町に生まれ、若年より呉春に師事したため、豊彦の年下の兄弟子にあたる。世評どおり人物図に優れ、筆力剛健な唐人物図から、繊細艶麗な美人図まで遺品はきわめて多い。技巧の適確さはいままでもなく、また濃絵風の装飾的な走獸画も伝わる。その画域の広さには卓越したものが認められよう。

今回、本館では掛幅・巻子・屏風・襖・絵馬など多彩な画面に描かれた豊彦・義董の作品を小室に特別展示する。

期間(2/5~3/9)



絹本着色 妓女図
柴田義董筆 本館蔵



紙本淡彩 山水図襖 岡本豊彦筆 本館蔵

新収蔵品資料の紹介

購入資料(53年度)

- ① 法然上人伝法絵断簡
「塩飽地頭館の段」 1幅
- ② 銀瓶製作工程資料 5点
- ③ 錦莞苳織機 1台
- ④ 高戸家資料 10点
 - 髪飾 7
 - 文箱 1
 - 燭台 1
 - 茶白 1
- ⑤ 良寛書屏風 6曲1双



繪本着色 法然上人伝法絵断簡
紙 「塩飽地頭館の段」

受贈資料(54年12月現在)



備前大甕

刀 銘 清光	1口	東京都	日笠	賢
備前焼	1括	岡山市	水ノ子	岩学術調査団
酒津式土器片	1箱	倉敷市	大島	勝
備前焼手榴弾	1点	瀬戸町	藤原	勝彦
備前焼杯他	3点	備前市	各見	政峯
甲本家資料	8点	久米町	甲本	博信
備前大甕	2			
制札	3			
ポスト	1			
甲火鉢	1			
炭櫃	1			

(敬称略)

昭和54年度重要文化財公開品目

本年度の承認、勧告出品による国指定重要文化財の品目は下記のとおりである。

1. 勧告出品 絹本着色十二天像 12幅
英田町 長福寺
2. 勧告出品 絹本着色仏涅槃図 1幅
尾道市 浄土寺
3. 承認出品 出雲玉作址出土品 1括
玉湯町 玉作湯神社
4. 承認出品 絹本着色十王図 10幀
総社市 宝福寺
5. 承認出品 絹本着色地藏十王図 1幀
笠岡市 日光寺
6. 承認出品 藍韋威肩白腹巻 1領
牛窓町 遍明院
7. 承認出品 色々威大鍔 1領
邑久町 豊原北島神社
8. 承認出品 紙本着色花鳥図 6曲1隻
御津町 妙覚寺
9. 承認出品 絹本着色阿弥陀二十五菩薩来迎図 1幅
牛窓町 遍明院

岡山県立博物館だより No.13

発行日 昭和55年1月10日
 発行者 岡山県立博物館
 館長 富岡敬之
 岡山市後楽園1-5
 TEL(岡山)72-1149